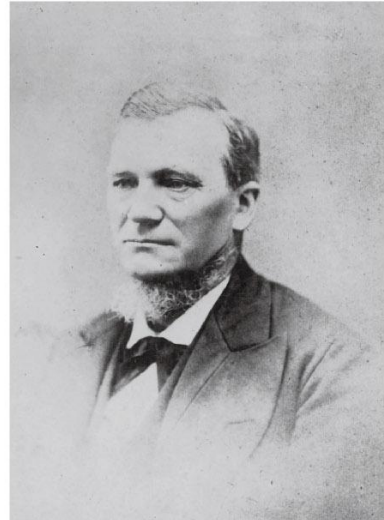


西洋音楽の師

メーソン

伊澤に音楽を教える

伊澤は25歳の時、アメリカ(ブリッジウォーター師範学校)へ留学した。そこで音楽の手ほどきを受けたのがメーソンであった。メーソンは、音楽を学びたいという見知らぬ日本人青年との出会いを喜び、毎週末伊澤を自宅に招いて唱歌を指導した。その中で、伊澤は日本への洋楽導入の構想をふくらめていった。



「Luther Whiting Mason」

音楽教師として日本へ

文部省に音楽取調掛が創設されると、メーソンを主任教師として招いた。メーソンも、自分が進めてきた音楽教育を検証する場所としてアジアの新興国日本は願ってもないところであったのであろう。メーソンは半年ほど入念な準備をしてから明治13年来日したことが、伊澤への手紙の中に書かれている。

日本初の唱歌集を作る



資料4 「小学唱歌集と見渡せば(むすんでひらいて)の楽譜」

伊澤とメーソンは協力して、唱歌集編纂を行った。「東洋と西洋の音楽の折衷」の考えから、西洋の原曲をメーソンが紹介し、それに日本の歌詞がつけられた。

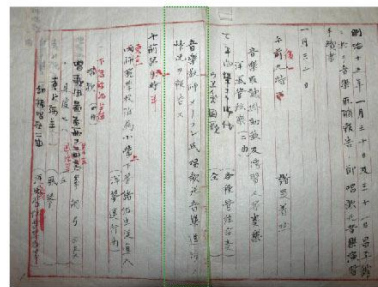
明治14年に出版された「小学唱歌集」(資料4)には後に「むすんでひらいて」で知られている「見渡せば」や、「蝶々」「蛍の光」など、今でも歌い継がれている曲も入っている。

明治15年日本初の音楽会を開く

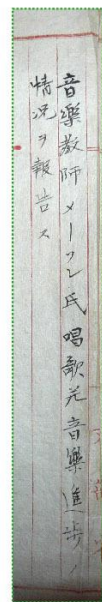
音楽取調掛では新曲を披露する演奏会を行い、事業の成果や音楽教育の必要性を訴えた。

明治15年に行われた演奏会プログラム(資料3・資料5)には、「音楽教師メーソン氏唱歌並音楽進歩ノ状況ヲ報告ス」とあり、メーソンが音楽取調掛を代表して成果を発表している。このことから彼が音楽教育の中心であったことがわかる。

演奏会では(資料6)にあるように、東京師範学校附属小学校の子どもなどが唱歌を発表し、メーソンが「風琴(オルガン)」や「洋琴(ピアノ)」で伴奏をした。



資料5 「伊澤自筆のプログラム原案」



資料5 部分拡大

下等諸級生徒唱歌 四種	百拾五名
見渡せば(箏胡弓合奏)	胡弓 林 蝶
春の弥生(風琴)	メーソン

女子師範学校生徒	本七十九名 与百四名
音楽取調掛助教及伝習人之二合ス	
単音唱歌	
燕 (洋琴)	メーソン

資料6 「演奏会プログラムの一部」



資料7 「メーソンが伴奏した燕の楽譜」

*資料は「伊澤資料」として上伊那教育会蔵、「創造館」に保管されている。 上伊那教育会郷土館部伊澤修二委員会作製 2011年10月23日